

アーバントリップ実行委員会

第86回JIAアーバントリップ

未来と過去

両端からの強い引力を感じながら



大竹 海

3月8日、第86回アーバントリップは、新しい空間を探り出す「太田市美術館・図書館」(平田晃久氏設計)・「川口市めぐりの森・イナパーク川口」(伊東豊雄氏設計)、過去の空間を今に蘇らせる「時間の倉庫(旧本庄商業銀行煉瓦倉庫)」(福島加津也氏+富永祥子氏設計)の見学であり、過去と未来、真逆の時間軸の両端から引っ張られるような、強い力を体感できる有意義な旅であった。

■太田市美術館・図書館

「太田市美術館・図書館」には、「雑然の心地良さ」を強く感じた。統一感ではなく「多様性」、区分けよりも「混じり合い」、計画性よりも「偶然性」を感じさせる空間である。「あえてバラバラの椅子を配置する」というカフェインテリアが近年流行したが、そういった「包容力」と「自由」を含んだ洒落なセンスと仕掛けが、ここに建築化されている。施設内外のあらゆる場所に隙間や重なりがあり、その曖昧さや不確定さに、使用者はオリジナリティを見出すのだろう。空間の質を敏感に感じ取りながら、誇らしげに楽しげに、自分なりの陣をはり、読書や調べものを行っている光景に出会った。駅前に建つ公共施設として、この包容力は理想的なものと映る。この建築を象徴するもののひとつが、屋内天井の剥き出しのデッキプレートであろう。デッキプレートの凹凸の向きはバラバラで、美的に整ったものとは言い難い。しかしコンクリートボックスと鉄骨の自由曲線で構成された動的空間は、このデッキプレートによって、さらに多様な方向



太田市美術館・図書館の外観

性を与えられている。「多様な人々が、多様なスタイルで使っていていい場所ですよ」と語り、誘っている。この建築の形は、使用者への行動提案の結果であり、形態美が優先された彫刻ではない、「場」の集合体を縁取ったものといえる。

■時間の倉庫(旧本庄商業銀行煉瓦倉庫)

「時間の倉庫」は、設計者である福島加津也氏によるレクチャーが素晴らしかった。建築をクラシックカーに例え、120年前の建築を今に稼働させることの価値、驚き、格好良さを、鮮やかに、かつ易しく説明された。建築の保存やりノベーションという言葉に、もう一度磨きをかけるような珠玉の言葉の連なりであった。レクチャーの後の空間の見学では、古いディテールの数々を発見し、また新しいものとの組み合わせの謎解きをしながらか歩き、ちょっとしたタイムトリップの感覚を味わわせていただいた。新しいものを追求する楽しみも良いけれど、過去というものは、それと全く同じ強度と興奮を持っているものだ、ということ強く教えてくれる建築であった。

■川口市めぐりの森・イナパーク川口

「川口市めぐりの森・イナパーク川口」は、公園内にある火葬施設である。公園と火葬場、この両者のマッチングの仕方にこの建築の要点がある。グニャグニャとしたクラゲのような三次曲面の外観は、周囲に計画される公園の森との一体感をはかっている。奇抜なものとしてされることの多い三次曲面は、自然の中においては、奇抜ではなく普通の形である、ということを示すのか。屋上には植栽があり、それらが今後育ってゆくことを容易に想像できる。建築と公園の緑はより一体感を増して、公園と火葬場の独自な関係を作ってゆくのだろう。生活の中の「死」の存在を再考させる建築となるのかもしれない。

今回の旅では、設計者の方々の熱い思いと膨大な仕事量を拝見し、多大な勉強をさせていただきました。現地で説明をいただいた設計者の皆様、企画された実行委員の皆様、ありがとうございました。